

TOKYO CULTURE CREATION PROJECT

NEWS
LETTER
Vol.3

平成 23 年 12 月 13 日
東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

当プレスニュースレターでは、東京文化発信プロジェクトの多様な事業を、さまざまな切り口からご紹介しています。

東京文化発信プロジェクト ネットワーキング事業レポート ～海外から見た東京の文化～

今年度の東京文化発信プロジェクトでは、創造的な東京の文化を世界に向けて発信し、国際的なネットワークの形成に向けた取組を強化しています。10月20日(木)～10月30日(日)に、多様な東京の文化を集中的に堪能できる期間として開催された『東京クリエイティブ・ウィーク』では、今年度から東京文化発信プロジェクトの新たな事業の柱としてスタートしたネットワーキング事業の「国際招聘プログラム」や、「FUTURE SKETCH 東京会議」などの、文化の国際交流を行うプログラムが開催されました。

平成 23 年度、第 3 号となる本ニュースレターでは、「海外から見た東京の文化」をテーマに、国内外の芸術・文化関係者が考える“東京の文化”をご紹介いたします。

CLOSE-UP①

「国際招聘プログラム」～海外から見た東京の文化とは～

「国際招聘プログラム」は、世界各国の若手の芸術・文化関係者 13 名を東京へ招き、東京文化発信プロジェクトを中心とした様々な文化事業や文化施設の視察、文化関係者との意見交換や交流といった体験を通じた、自国での東京の文化の発信や、関係者同士のネットワーク形成を目的とした初の試みとなるプログラムです。期間中、ゲストには、東京文化発信プロジェクトの多数の事業に参加し、東京の文化に触れていただきました。今回のニュースレターでは、このプログラムの参加者の中から 3 名の方にお話を伺いました。



インタビュー①:レオ・シューLeo Xu (中国) ～東京は、「建築の実験室」～



1 人目は上海を拠点にキュレーター、ライターとして活動するレオ・シュー氏です。今年 9 月上海で開催された ShContemporary 現代アートフェアのビデオ・ライブパフォーマンスのキュレーションや、ご自身のギャラリーをオープンするなど、活躍の場を広げています。

近年アジアの様々な都市でアートシーンの台頭がありましたが、アジアエリアのアートとして、東京・北京・上海・香港・バンコクなどの各都市が協力して1つのコミュニティを形成できないかと思います。公共機関や教育機関、美術館、ギャラリー、そしてメディアなどもあわせて総合的なコネクションを強化することが重要です。アジアの国々はアートの発展の仕方からマーケットに至るまで多くの類似性を持っています。そしてその特徴をさらに強固なものに発展させるために協力できることがあるはずです。以前の文化交流はアジアの1都市と欧米の国、例えば東京とアメリカという構図でした。これからはアジアとヨーロッパ、アジアとアメリカといった構図になると思います。アジアの国々のリソースをシェアし、開発し、最大限に活用する事が期待されます。日本人のキュレーター・アーティストも、イベントやトークセッションなどの短期間の中国滞在だけではなく、例えばスポンサーのサポートを得てのレジデンシーや中国でのゲストキュレーターシップ等、長期にわたる活動への参画も有効だと考えます。

ー東京に対するイメージを教えてください。

今回が初来日ですが、日本のテレビ番組や漫画、そして日本のアーティスト達との仕事を通じて日本の文化に触れてきました。日本は音楽・映画・写真など多くの文化を作り出し、おそらく私の同世代の多くは日本の文化に大きな影響を受けています。そして、これまで見聞きし想像していたイメージと比較にならないほど鮮明で豊かな情報が東京には溢れていました。また、特に印象的なのは東京の建築です。上海、香港、東京、この3つの都市計画も違った特徴を持っていて、とてもローカルな街角にもその違いが見て取れます。東京はとても計画的に建物が建てられていますね。さながら様々なアイデアと機能性を試みた“建築の実験室”のようです。

ー東京文化発信プロジェクト事業に参加してみた

「東京大茶会 2011」に参加し、茶会のすべての礼儀作法が人々の普段の立ち居振る舞いにも通じていると聞くなど、日本の伝統文化に深い感銘を受けました。また、ミュージアムディレクターやキュレーター等、私と同じフィールドで働いている多くの日本人と交流でき、お互いの都市の文化的な状況や、特にここ数年のビジュアルカルチャーの発展など有意義な情報交換ができました。

ーアジアのアートシーンについて

ーレオさんのギャラリーオープンについて

レオ・シュー・プロジェクトの一環として展示スペースをオープンしました。私は、他の会場で展示するには先進的で実験的と思われる若手アーティストのスポンサーとして場を提供し、彼らが生き残るために育成しています。ヨーロッパやタイなど海外のアーティストもいます。また、自分のスペース以外でもいくつかの美術館などのキュレーションにも関わり、常に新しいプロジェクトやイベントの可能性を模索し、新たな才能に目を光らせているのです。例えば、若い世代のアーティスト達の作品を通じて、東京と上海、2つの都市の間でカルチャーダイアログのような展示ができるのではないかと考えています。今も東京で新しいプロジェクトのリサーチをしていますよ。

<プロフィール>

上海を拠点に活躍するキュレーター、ライター。上海 Zhu Qizhan Art Museum 学芸員、Chambers Fine Art Beijing ディレクター、上海の James Cohen Gallery のアソシエイト・ディレクター歴任後、今年独立しギャラリーをオープン、LEO XU PROJECTS をスタートさせる。現代美術批評も多数執筆。

インタビュー②:シルヴィア・ペトロヴァ Silvia Petrova (ブルガリア)

～心の内から来る日本人の礼儀～



2人目は、各地の演劇祭や劇場で演出助手を務めるドイツ在住のシルヴィア・ペトロヴァ氏。ジャーナリストとして執筆を行っているカルチャー誌EDNOを通して母国の人々に伝えたい日本の文化についてお話を伺いました。

—東京に対するイメージを教えてください。

日本も初めてですし、アジアも今回が初めてで吸収する事が多すぎて驚いています。現在、私はドイツ在住ですが、出身は人口800万人のブルガリアですから、驚きを想像いただけますよね。まさしく東京はメトロポリス！そして、私は4か国語を話しますが、ここまで言葉がわからないところに来たのも初めてで、もうアドベンチャーです。

—ブルガリアとの文化の違いを感じましたか。

日本には“ステレオタイプ”のイメージを持っていました。勤勉で礼儀正しく、人との間に精神的な距離をおいて接するので本心が見えないなどでしょうか。でも日本に来て感じたのは、日本人の礼儀正しさはその仕草だけではなく、心の内からきているものだという印象を受けました。相手に対してだけでなくおそらく自分自身へも配慮をしているのではないのでしょうか。

—東京文化発信プロジェクト事業に参加してみて

美術館や公演が印象的でした。私のバックグラウンドが演劇ということもあり、特にフェスティバル/トーキョー11 (F/T11) の「鳥公園」や「バナナ学園純情乙女組」の演出家と演劇について交流できた事は嬉しかったです。また、「Referendum — 国民投票プロジェクト」については、ぜひ帰国後、記事を執筆したいと考えています。

—シルヴィアさんのEDNOの活動について

EDNOのメインコンセプトは、ブルガリア国内外の文化交流を活性化することです。雑誌やオンライン媒体、そしてフェスティバルという形を通じて交流を図っています。雑誌では、世界中の様々なコンテンポラリーカルチャーを紹介していて、三浦大輔さん(ポツドール)についての記事も執筆しました。帰国後、「プロジェクト FUKUSHIMA!」の記事も次号に掲載する予定です。また、来年のフェスティバルには、ぜひ日本のダンスカンパニーを招聘したいと考えています。

—復興に向けて文化はどのような貢献ができると思いますか？

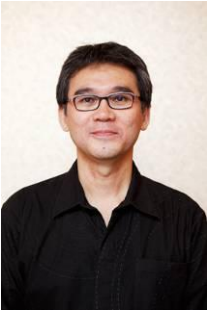
今回の来日で様々なキュレーター達と交流し、未曾有の大震災によってプロジェクトの大幅な変更を余儀なくされた話などもお聞きしました。また、東京都写真美術館の「畠山直哉展 Natural Stories」や神里雄大氏の作・演出で岡崎藝術座による「レッドと黒の膨張する半球体」(F/T11)など震災の影響を受けた様々な作品も拝見しました。彼らは、アートのテーマ性やどのようなメッセージを発信するのかということに、とても大きな責任を担っています。ブルガリアでも、過去にチェルノブイリ事故の際、大きな影響を受けたこともあり、今回の日本での災害を遠くの出来事とは思っていません。ブルガリア人ジャーナリストのイワン・クレコフ氏が津波5日後に福島で撮影した写真と俳句のような短い詩を合わせたショートムービーを国営放送で放映し、ブルガリア国内で大きな反響を呼びました。優れた作品は強いメッセージを持っていますし、更なる情報が必要とされていると感じています。EDNOはカルチャー媒体ですが、同時に人々のリアルな生活や思想を紹介するプラットフォームでもあるので、様々なメッセージを発信していきたいと思っています。

<プロフィール>

ドイツ在住、各地の演劇祭や劇場で演出助手を務める。ケルンの Kurt Hackenberg Prize for Political Theater 賞受賞。ケルン市立劇場のプロダクションにドラマトゥルグとして、またパフォーマーとしても関わる。西部ドイツ放送(WDR)でブルガリア向けの放送番組制作も手掛け、ブルガリアの戯曲翻訳も。ジャーナリストとして母国のバイリンガル・カルチャー誌 EDNO や LIK に執筆。

インタビュー③:マルコ・クスマウィジャヤ Marco Kusumawijaya (インドネシア)

～歴史や伝統を重んじる日本人と文化～



最後は、スマトラ島沖地震復興プログラムの中心的存在として具体的に事業を進めた実績を持つマルコ・クスマウィジャヤ氏。建築、環境、都市研究、アート、文化に総合的に携わっているマルコ氏が考える東京の文化についてお話を伺いました。

あってほしいと強く思います。

—東京文化発信プロジェクト「FUTURE SKETCH BOOK」について

それぞれの未来への想いをスケッチするこのプロジェクトは非常に有効だと思います。みんなのスケッチ（声）を基に未来を描けるように、ただ集めるだけでなく社会に発信していくことがこのプロジェクトの重要な使命ではないでしょうか。

また、子供達の声を集めて収録し、公開した「Referendum - 国民投票プロジェクト」には感銘を受けました。特に「大人達に何をいいたい？」の問いに対し、「何かを決める時は僕らのことを思い出して」はシンプルですが考えさせられる意見です。つまり、私達大人が決定したことが、投票権のない子供達の未来を決めてしまうということ。また、私達ももし間違った決断を下せば、その被害を長く被ることになるのは、子供達だということを的確に表現しています。

私達は若者の声を継続的に吸い上げてこれからの決断に組み込むシステムを模索しています。「FUTURE SKETCH BOOK」も同様です。まずここからスタートしてほしいと思います。

—復興に向けた日本へご意見をいただけますか。

先月、東京大学で地域復興に関わっている専門家達と話した際、「地元の人々を信じ、そして彼らを被災者ではなく生存者と呼んでほしい」という意見を聞きました。

コミュニティ意識が強く、団結してイニシアティブがとれる彼らを、弱者として助けるのではなく、彼らがもう一度自分達の人生を自ら立て直すのをサポートするという意識が大切です。重要なのは地元住民自身の手で、一刻も早くコミュニティを再形成することではないでしょうか。

—東京に対するイメージを教えてください。

東京は、今回が4度目です。毎回異なる場所を訪れ、様々な人達に会い、来るたびに違う印象を受けます。東京にはいくつもの顔があると毎回実感しています。

—インドネシアとの文化の違いを感じることはありますか。

東京は、非常に近代的な都市である反面、文化遺産をはじめとする歴史や伝統をととても大切にしているということは大きな発見でした。インドネシアには日本の文化財や国宝のような保護制度は無いため、多くの文化遺産が略奪などの被害にあっています。現在、私達アーティストは、このような保護制度の確立を政府へ働きかける活動を行っています。

—現在、日本は復興に向けて大きく動いていますが、文化はどのように貢献できると思いますか。

震災後、実に多くのマインドと思考がアートに向かっているという印象を受け、とても重要な傾向だと感じています。インドネシアは、過去に大きな津波を経験していますが、今の日本ほど積極的にアートを通じて被災経験を振り返るという事はしてきませんでした。

アートを通じて震災を振り返ることはとても意味のあることだと思いますが、同時に全ての個人、そしてアートが震災と無関係ではいけないという風潮を引き起こすことは心配な事でもあります。アートとは、自由なもので

<プロフィール>

建築、環境、都市研究、アート、文化に総合的に関わる。前ジャカルタ芸術協会（アーツカウンシル）所長（2006年～2010年）。アチェの23村の復興などスマトラ島沖地震復興プログラムを具体的に進めた中心的存在。現在はよりよきジャカルタのために誰もが知識やノウハウを共有できる RUJAK Center for Urban Studies のディレクター。

CLOSE-UP②

「FUTURE SKETCH 東京会議」

「国際招聘プログラム」の参加者も交えた「FUTURE SKETCH 東京会議」は、東京文化発信プロジェクトの今年度のテーマである「TOKYO FUTURE SKETCH ～日本の未来のために、文化ができること～」にダイレクトに取り組むプログラムです。震災後の日本において芸術・文化がどういう意味を持ち、何ができるのか、文化を通してどのような未来を描けるのかなどについての議論が行われました。

2日間にわたって開催された「FUTURE SKETCH 東京会議」のレポートを以下、ご紹介させていただきます。

--- テーマ 1:「新しい社会をデザインし、新たなつながりをつくるために」 <10月28日> -----

「FUTURE SKETCH 東京会議」初日には、震災直後の混乱の中、有益な情報メディアとして大いに注目されたソーシャル・ネットワークを中心に、基調講演、及びパネルディスカッションが行われました。

<基調講演>

ニュージーランド地震の復旧復興活動でFacebookを使って大きな役割を果たした学生組織「UC Student Volunteer Army」創設メンバーのジーナ・スキャンドレッド氏が、組織創設の経緯と活動の展開について基調講演を行いました。

「それまで大学生は地域コミュニティから怠惰でやる気のない存在とみられていたが、「UC Student Volunteer Army」の活動を通して、「未来のリーダーたち」とみなされるようになった」と、ソーシャルメディアを活用して横につながることができただけでなく地域のコミュニティにその活動が認められ、受け入れられた経緯を紹介しました。

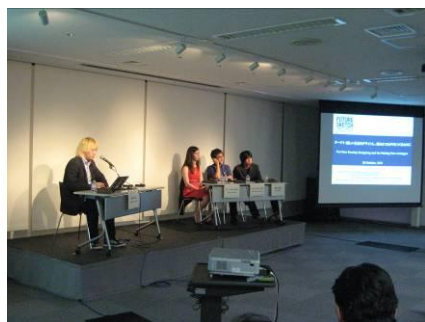
<パネルディスカッション>

ジャーナリストの津田大介氏を司会者に、基調講演を行ったジーナ・スキャンドレッド氏、RUJAK Center for Urban Studies ディレクターのマルコ・クスマウィジャヤ氏、未来美術家の遠藤一郎氏をパネリストとして迎えて、パネルディスカッションが行われました。

■若者の可能性を引き出すために必要なこと

まず、スキャンドレッド氏の基調講演での学生組織の成功事例を受けて、若者が持っている可能性をいかに引き出すか、という点について議論が展開されました。

「自由を提供すると若者は動き出す。



そして、若いからミスも犯すが、それを許容することが必要」、「乱暴な言い方だが、野放しにする。これが可能性を広げていく」など、若者に物事を押しつけるのではなく、自由を提供することの重要性が話し合われました。

■ソーシャルメディアによる新しいコミュニティ

多くの人を巻き込んでいくツールの1つとしてソーシャルメディアに話が及び、そのソーシャルメディアが作る新しいコミュニティと、従来のコミュニティの違いについて議論が展開されました。

「これまでとは違い、今は距離の壁がなくなった。ソーシャルメディアでは、隣の人ではなく地球の反対側の人ともコミュニケーションすることが可能」とその優位性があげられる中、「ソーシャルメディアによってロンドンでは暴動が拡大した」、「ほとんどの国民がアクセス出来ない国もあり、様々なメンテナンスが必要」などの指摘も。さらに議論は、コミュニティの変化に併せて、求められるリーダー像も変化しているのではと話が展開。「トップダウンではなく、輪の中心にいる人が今のリーダーで、そのコミュニティの情報を外に拡散し、グローバルなコミュニティ同士の連携や新しい力を生み出していくことが求められている」などの意見があがりました。

■新しい社会をデザインし、新しいつながりをつくるためには何が必要か？

これまでの議論を踏まえ、本会議のテーマについて、遠藤氏は「人が必要。過去から受け継がれてきた色々なものや、自然とのつながりの上に僕達は立っている。人がやっていく重要性を人がもう一度認識すること」、クスマウィジャヤ氏は「持続していくためには悲観と楽観の両方必要。より懸命に想像力豊かに、多くの人とつながりを持つことが大事」、スキャンドレッド氏は「ソーシャルメディアでも、リアルでも、必要なのはコミュニケーションをしっかりとっていくということ」と、最後には、「人とコミュニケーションが重要である」ということが共通して述べられました。

テーマ2:「3.11 以後の文化の力」 <10月29日>

「FUTURE SKETCH 東京会議」2日目は、「3.11 以後の文化の力」をテーマに、1日目同様、基調講演とパネルディスカッションが行われました。

<基調講演>

オーストラリア国立大学教授のテッサ・モーリス＝スズキ氏は、「震災後の日本に寄せて」と題して基調講演を行いました。「東日本大震災によって、日本の社会、経済、そして政治的な制度には弱点があることが露呈してしまった」と指摘する一方で「草の根的なコミュニティが立ち上がり、弱点を上手くカバーした」と市民グループの影響力が大きかったことを訴えました。

続いて、初日でパネリストを務めたマルコ・クスマウィジャヤ氏は、実際に災害復興に関わり、ロサンゼルスや東京での研究滞在、さらには国連環境計画国際資源パネルのワークショップに参加した経験をもとに、「文化、災害、そしてエコ都市の未来とは？」と題して基調講演を行いました。

<パネルディスカッション>

司会として東京都歴史文化財団エクゼクティブ・アドバイザーの加藤種男氏、パネリストには基調講演を行った2名に加え、ウィーン芸術週間演劇部門チーフドラマトゥルグのマティアス・ペース氏、中国で活躍するアーティストでキュレーターのオウ・ニン氏、ギタリスト・音楽家の大友良英氏、ジャーナリストの津田大介氏が参加したパネルディスカッションが行われました。

■世界とのつながりを文化によって実現するために

加藤氏は、震災を受けての東京の現状を「職場と家を行き来すら出来ない都市になってしまっている」、「東京から外国人がいなくなってしまう。」などと指摘。その上で、「東京と世界とのつながりを文化によって実現するために、どのようなことができるかを議論したい」と提案し、象徴的な例として、「FUTURE SKETCH BOOK」の取り組みを紹介した上で、パネリストがそれぞれ自らの取り組みや経験をもとに意見を発表し合いました。

ペース氏は、「ドイツのドラマトゥルグには100年の歴史があり、私たちは、芸術や文化の部分から、市民社会にどのように貢献できるかを考える役割がある」と述べ、さらに自身がプロデューサーとして関わって

いるブラジルのコミュニティでのプロジェクトについても紹介しながら、「震災という試練の中で、日本のアーティストが、自分に何ができ

るかを考えていることに深く感銘を受けた」と語った。四川省の大地震で、被災者へ新たな文化を送り込むという活動経験をもつオウ・ニン氏は、「都市化はあまりよくない。税金を払っているから政府がやってくれるという姿勢ではなく、相互に協力し、労働を提供しあうつながりが重要」と、より地方に目を向けるべきと主張しました。

福島でフェスティバルの開催をするなどの活動を行った大友氏は、「祭りは、天災など何か大きな被害を受け、立ち上がっていく際にきっと必要なものだと思う。未来は自分たちでつくっていくというのがフェスティバルのテーマでした」と述べ、フェスティバルに込めた思いを語った。

同様に福島でイベントをプロデュースしたという津田氏は、「取材がきっかけで、人と人、さらにはその想いがつながっていった。文化によって人と人をつなげることができるということが再提示され、今回の震災で浮き彫りになった」と文化の重要性を改めて訴えました。

■草の根的な市民社会を作りつつ、世界とのネットワークを構築することが鍵

最後には司会の加藤氏が、「持続可能な都市の実現のためには、東京のこと、日本のことだけ考えていてもいけない。様々な地域のことを考えていくことが大切であると今回の議論でわかった。様々な地域のことを考えるには、草の根的な市民社会を作りつつ世界とのネットワークを構築することが鍵になると感じている。そして、その中に芸術や文化を取り込むことが、早期構築の実現につながる1つの手段になると思われる」とパネリストの意見をまとめました。



東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。都内各地での文化創造拠点の形成や子供・青少年への創造体験の機会の提供により、多くの人々が新たな文化の創造に主体的に関わる環境を整えるとともに、国際フェスティバルの開催等を通じて、新たな東京文化を創造し、世界に向けて発信していきます。

〈この件の取材・掲載に関する報道関係の皆様からのお問合せ先〉
東京文化発信プロジェクト 広報事務局 担当:村澤・宮島・坂元・村木
〒107-0052 東京都港区赤坂 4-15-1 赤坂ガーデンシティ 18F
TEL:03-6675-9298 FAX:03-5572-6065 MAIL: tokyobunka@vectorinc.co.jp